音楽監督ジョナサン・ノット

2017年度シーズンを語る。

all photos by ヒダキトモコ

2016年10月11日（火）、ミューザ川崎シンフォニーホールにて2017年度シーズンラインナップ記者会見を開きました。専務理事・楽団長 大野順二の挨拶に続き、次年度6演目9公演に出演する音楽監督ジョナサン・ノットが自身のプログラミングについて語りました。

即興なくして、音楽はなりたたず。

「本当の音楽作りは即興性がなければならない」というのが私の持論です。演奏家と聴衆の皆様の特別な「今」という瞬間を大切にしたいと考えているためです。ですから、リハーサルで方向性は決めるものの、コンサートでは全てを忘れて音楽に没頭します。

音楽作りはこうしたリスクなしには不可能です。そして、聴衆の皆様の反応はコンサート一つ一つによって違います。個人として表現したいことを他の個人に伝えるという試みは、成功することもあれば失敗することもありますが、そうした中でも私のやりたいことを感じ取ってくれる楽団員の姿勢に、いつも感謝しています。

5月のブルックナー＆7月のマーラー

来年度も「コンサートを通しての旅」というテーマを意識しながら、プログラムを考えました。これらを通して、楽団員とより深く密な関係を築いていきたいと考えています。

将来的にはベートーヴェンやマーラーの交響曲全曲、R.シュトラウスを取り上げてみたいところですが、もちろんブルックナーも大好きですので、来シーズン最初の出演（5月）では**《交響曲 第5番》**を取り上げます。

かつて、「こんなにもドライなブルックナーがありうるのか」と驚くべき演奏を聴いたことがあります。そのときに5番のスコアに向かったのですが、リズムは非常に難しく、対位法も複雑。しかし、なんと美しい曲だろうと思いました。今回はそこにモーツァルトの**《ピアノ協奏曲 第6番》**を組み合わせています。そして、7月は素晴らしい合唱とともにマーラーの**《交響曲 第2番「復活」》**をと考え、細川俊夫さんの**《嘆き》**とつないでみました。

変奏曲とBACH（10月）

新ウィーン楽派――いわば古い現代音楽――には、後の時代の作品に比べ豊かなアイデアや音色が含まれています。ただ一つの大きな問題は調性がないという点で、音楽家としてはそこに様々な音色を見出して表現することが重要といえるでしょう。10月は変奏曲というテーマの下、大編成の作品としては初めて12音技法が用いられた、シェーンベルクの**《管弦楽のための変奏曲》**を取り上げます。これはバッハを示すB-A-C-Hの音型を用いて書かれた一見難しい曲ですが、リストの**《バッハの名による前奏曲とフーガ》**を100回聴けば、すぐにそのモチーフが分かることでしょう。

実は、このシェーンベルクの作品とプログラムの最後を飾るラヴェルの**《ボレロ》**は、面白いことにどちらも1928年の作品。一方は未来に向かっていて、もう一方は作曲者自身が「最も有名な私の作品は、最も音楽が少ない」といったように変奏曲とも呼び難い作品ですが、こうしたテーマの下に2つを組み合わせました。

ホルンの一夜（12月）

リゲティの**《ハンブルク協奏曲》**で始まる12月のプログラムには、私が首席指揮者を務めたバンベルク交響楽団のホルン奏者が登場します。リゲティは非常に知的ですが、魂を感じる曲で現代音楽が苦手という人に打ってつけです。

実のところ、私は来シーズンの中で最も現代的で斬新な音楽は、ベートーヴェンの**《交響曲 第3番「英雄」》**ではないかと思います。最近、BBCミュージック・マガジンが世界中の指揮者に「最も好きな交響曲」「最も重要な交響曲」についてアンケートを取りました。私は両方に**《英雄》**を挙げたのですが、ランキングを見るとやはりこの曲がどちらもトップ。**《英雄》**は現代的でスリリング、そしてワクワクする曲なのです。3という数字が作品を通して重要な意味を持っており、神ではなく人間がお互いにどのような関係を築いていくのかという点を評価しているように感じます。

東京オペラシティシリーズ（5月、10月）

5月の東京オペラシティシリーズで取り上げるバートウィッスルの**《パニック》**は、BBCプロムスで初演されたときにスキャンダルとなったほど冒険的で斬新な手法をとった作品です。ハーマンの映画音楽**《タクシードライバー》**のサクソフォーンのメロディーから**《パニック》**のサクソフォーンへ繋ぐことで、叫びとでもいえるような特徴的な音色を強調してみたいと考えています。

そして、最後のベートーヴェンの**《交響曲 第8番》**は、私にとって東京とつながりの深い曲。というのも、東京滞在中のある夜に目が覚めてしまい、勉強でもしようかと思ったときに手にしたのがこの8番だったのです。音源を聴き終わるころにはすっかり興奮してしまい、結局明け方までスコアをじっくりと読み続けました。最終楽章に入ったときに半音で音が動いていくところは、人間であることの素晴らしさの最高の表現ではないかと思います。

10月に演奏するハイドンの**《交響曲 第86番》**とモーツァルトの**《交響曲 第39番》**は、作曲時期が1年半程度しか違いません。2人の偉大な作曲家は同時期にどのように交響曲を書いたのか、共通する部分に注目するのも面白いでしょう。

コンサートを聴きにいらっしゃる皆様から、歓迎のムードとプログラムを楽しんでくださっているという手ごたえの両方を感じます。非常に居心地が良く、ここに来てよかったと感じる日々が続いています。

■2017年度 定期会員券　好評発売中
■2017年度 選べるプラン・1回券
東響会員先行発売…2016年11月29日（火）
一般発売…2016年12月6日（火）

ノット監督を囲む報道陣